



**Data**

監督: 白石和彌  
 出演: 門脇麦/井浦新/山本浩司/  
 岡部尚/大西信満/タモト  
 清嵐/毎熊克哉/伊島空/  
 外山将平/藤原季節/上川  
 周作/中澤梓佐/満島真之  
 介/洪川清彦/音尾琢真/  
 高岡蒼佑/高良健吾/寺島  
 しのぶ/奥田瑛二/柴田鷹  
 雄/西本竜樹

## 👁️👁️ みどころ

私の大学入学は1967年4月。東大の安田講堂事件は1969年1月。赤軍派による「よど号」ハイジャック事件は1970年3月。三島由紀夫の割腹自殺事件は1970年11月だ。そんな時代状況の中、私はある日、学生運動ときっぱり縁を切り司法試験の道に進んだが、当時“ピンク映画の旗手だった”若松孝二監督とそのプロダクションはどんな生き方を・・・？

目下『カメラを止めるな!』(17年)が大ヒット中だが、止まらないのは“俺たち”も同じ。“俺たち”とは、若松プロに結集する足立正生、荒井晴彦そして紅一点の吉積めぐみ等だが、なぜ彼らはそこに結集したの？

その意味を、何とも無謀な本作の企画で、今の時代に、今の若者たちに問うのは白石和彌監督。若松門下生としての彼の意欲が“止まらなかった”のは十分理解できるが、本作も『カメラを止めるな!』と同じように大ヒットするの？それとも、俺たちは“止められてしまう”の・・・？

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□■ “止まらない”のはカメラだけでなく、“俺たち”も! ■□■

製作費わずか300万円の『カメラを止めるな!』(17年)が超異例の大ヒット! シネ・リーブル梅田では、今なおロングラン上映が続いている。他方、テレビのBS放送の音楽番組は今や“昭和の歌”一色になっているが、そんな中、2007年に亡くなった昭和を代表する作詞家、阿久悠の歌詞がもてはやされ、山本リンダが1972年に歌った“どうにもとまらない”も大ヒットしている。

そんな今、“止まらない”のはカメラだけではなく、1960~70年代を自由奔放に(ハチャメチャに?) 生きた若松孝二(井浦新)を代表とする“若松プロダクション”に結集する

若者達だ。そこには、最後まで盟友だった足立正生（山本浩司）やオバケこと秋山道男（タモト清嵐）、荒井晴彦（藤原季節）らが結集していた。そして、本作の主人公になるのはただ一人だけ女性の助監督として“若松組”に参加していた吉積めぐみ（門脇麦）だ。

時代は1969年春。舞台は新宿。21歳のめぐみはオバケに誘われて若松プロダクションの事務所を訪問したが、そこは当時ピンク映画の旗手・若松孝二監督を中心とした若者達の巣窟だった。私は1967年4月に大阪大学法学部に入学し、“裁判問題研究会”というサークルに入ったが、そこは日本共産党の下部組織である民青（民主主義青年同盟）を中心とする学生運動の巣窟だった。私はそこで大きな洗礼を受けたが、さて、めぐみは？

「映画を観るのと撮るのは、180度違う・・・」と感じながら、めぐみが若松監督の魅力に惹かれていく様子は本作を観ているとよくわかる。若松プロでは“みんな給料ゼロ”だったらしいが、今では到底考えられないそんな劣悪な労働条件の下、めぐみはなぜそこで働いたの・・・？本作を鑑賞するについては、それをしっかり考えたい。

## ■□■本作を企画したのは誰？なぜ？若松監督の素顔は？■□■

本作を監督したのは『凶悪』（13年）（『シネマ31』195頁）で一躍脚光を浴び、『彼女がその名を知らない鳥たち』（17年）（『シネマ41』57頁）や『孤狼の血』（18年）（『シネマ42』未定）でも注目されている白石和彌監督。1974年生まれの彼は、1995年に中村幻児監督主催の映像塾に参加。以降、若松孝二監督に師事し、フリーの演出部として活動。若松監督の『明日亡き街角』（97年）、『完全なる飼育 赤い殺意』（04年）、『17歳の風景 少年は何を見たのか』（05年）（『シネマ8』300頁）などの作品へ助監督として参加した。

“ピンク映画の旗手”としてスタートし、苦しい映画業界の中で“若松プロ”を破産させることなく存続させてきた若松孝二監督は、『実録・連合赤軍 あさま山荘への道程』（07年）（『シネマ18』56頁）で第58回ベルリン国際映画祭の最優秀アジア映画賞と国際芸術映画評論連盟賞をW受賞し、2010年には『キャタピラー』（10年）（『シネマ25』215頁）で主演の寺島しのぶが最優秀女優賞（銀熊賞）を受賞した。この頃が若松孝二監督の全盛期だろう。その後も彼の制作意欲は衰えず、『11・25 自決の日 三島由紀夫と若者たち』（11年）（『シネマ29』93頁）、『千年の愉楽』（11年）（『シネマ30』153頁）と続き、私も大いに期待していたが、突然2012年10月17日交通事故で死去した（享年76歳）。

それから6年後の今、無謀とも思える白石監督の企画によって本作が完成し、公開されたが、なぜ白石監督は今こんな映画を？本作を鑑賞するについては、それをしっかり考える必要がある。ちなみに、私は『シネマ29』に『11・25 自決の日 三島由紀夫と若者たち』の映画評論を掲載するについて、若松監督が交通事故に遭った10月17日の数日前に直接監督自身から電話をいただき、原稿の一部修正の要請をもらった。そして、その誠実な態度に驚くと共に、「若松監督はさすがこんな男！」と感心させられた。したがって、私的にも白石監督の本作のような企画に大賛成だし、その出来も上々だが、さて、あの当時の若

松監督たちとは真逆の生き方をしている今の若者達の受け止め方は・・・？

## ■□■ハチャメチャで口は悪いが、その魅力と求心力に注目■□■

現在女子体操界では、18歳の宮川紗江選手からの“パワハラ糾弾”を受けた、日本体操協会副会長の塚原光男氏とその妻で協会強化本部長の塚原千恵子氏が窮地に陥っている。理事会は9月10日に2人の職務を一時的に停止することを決めたことを発表した。某週刊誌における、2004年のアテネ五輪男子体操団体総合で金メダルを獲得した息子の塚原直也の発言によると、彼の両親はたしかに口が悪いらしい。しかし、いくら口が悪いと言っても、本作で若松監督が見せる口の悪さに比べれば、はるかにましだろう。政治家ではアメリカのトランプ大統領の口の悪さが目立っているが、日本でも、かつては石原慎太郎や渡辺美智雄など、少し口が悪く時々過激な発言をする政治家がいた。しかし、今や政治の世界でも、過激発言はもとより、少し口の悪い発言も厳禁だ。全て安全に安全にマスコミを刺激する発言は控えているが、それってホントはダメなのでは・・・？そう思っている私も、口の悪さでは今や絶滅危惧種に近いと自覚しているが、本作ではあの時代の若松監督の生き方のハチャメチャさと口の悪さに注目したい。

そんな男の作る映画や、そんな男が経営するプロダクションに、吉積めぐみをはじめとする多くの若者達が集まって来たのは一体なぜ？それは、ハチャメチャで口は悪いが、その男には魅力と求心力があったからだ。本作を観ていると、井浦新演じる若き日の若松監督はカッコ良すぎる感があるが、本作を鑑賞するについては彼のそんな外見上の魅力ではなく、ハチャメチャで口は悪い、若松孝二という男の生き方の魅力と求心力に注目したい。

## ■□■レバノン行きが転機に！その是非は？■□■

本作のパンフには、若き日の若松監督と若松プロの映画制作の記録がある。それを見ると、時代が①1968年5月のパリ5月革命、②1969年1月の東大安田講堂事件、③1970年3月の赤軍派による「よど号」ハイジャック事件、④1970年11月の三島由紀夫の割腹自殺事件と流れていく中で製作されていた映画は、『通り魔の告白 現代性犯罪暗黒篇』（69年）、『初夜の条件』（69年）、『性の教科書 愛のテクニック』（70年）等のけったいな映画ばかりだ。大学時代の私はそんなタイトルの映画をよく知っていたが、もちろん観に行く暇はないうえ、鑑賞意欲も湧かないものばかりだった。

安田講堂事件や「よど号」ハイジャック事件以降、学生運動は急速に下火となったが、そんな情勢下1971年5月の第24回カンヌ国際映画祭監督週間では、若松監督の『犯された白衣』、『性賊』が上映されることに。そして、若松監督と足立正生はカンヌ国際映画祭の帰りにレバノンに渡り、『PFLP 世界戦争宣言』（71年）を撮影することになったが、本作後半からはそれがメインストーリーとして描かれる。私が若松監督は凄い、偉いと思うのは、自分の政治的立場や信条に固執せず、映画のため、若松プロ経営のため、という

徹底した現実路線に立って歩み続けた事だ。“映画を作ることによって世の中をぶっ潰したい”という欲求をもつ若松監督だから、常に彼の社会に対する問題意識は研ぎ澄まされていたはず。したがって、前述した①～④のように時代が大きく動いていく中、日本の政治をぶっ壊すようなテーマで映画を作りたいはずだ。ところが、現実にはピンク映画の延長のような映画ばかり撮っているし、吉積めぐみに至っては、1971年5月に、やっとラブホテルで流す30分のテレビカセット『うらしまたろう』を監督できただけ。しかも、その完成品には買い手がつかずお蔵入りになってしまったから、そんな彼女の映画監督としてのデビューはなんともみじめなものだ。

そんな若松監督と若松プロに転機が訪れたのは、カンヌ国際映画祭の帰りにパレスチナのキャンプ地を撮影してカネをもらおうという契約をしたこと。出発前の計画では、これはカネのためだったが、いざ実際にキャンプに入ってパレスチナゲリラの訓練を受け、彼らが攻撃を受けて死ぬ直前に帰国させられた実態を知ると・・・？重信房子や岡本公三の名前はあの当時の“連合赤軍”事件と結びついてしっかり記憶されているが、彼らの意図はともかく、その活動が客観的にナンセンスなものであったことは今でははっきり立証されている。しかし、パレスチナから帰ってきた若松監督が下したある大きな路線修正の決断とは・・・？私たちは本作を鑑賞しながらその是非をしっかりと確認したい。

2018（平成30）年9月14日記